

三河アララギ

平成二十四年

十二月号

第五十九卷 第十二号



ニューヨーク日記(74) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

September 23, 2012 : Columbus circle

Blue Shoe Diaries



雲一つ無い良い天気!その上週末だからセントラルパークを散歩する暇も有り!こんな日は続かないから今の内に楽しまないと。この後は近くのお気に入りのレストランで秋を迎えるお祝いってことにしてミモザを飲みに行きました。ご機嫌!

Beautiful day, not a cloud in the sky! A perfect day to walk around Central Park (makes you wish you had a puppy...). It's the beginning of fall, my favorite season. These beautiful days don't last so I'm making the most of it. That means stopping by after this walk to a near by favorite restaurant for a delicious and refreshing flute of mimosa to welcome autumn.

目次

第五十九卷第十二号(通卷七〇八号)

表紙 白樺	今泉 由利 (1)	浄願寺	白井 信昭 (27)
ニューヨーク日記(74)	Blue Shoe (2)	留学	阿部 淑子 (28)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	猫ジャラシ	富岡 和子 (28)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
北馬場の道	岡本八千代 (6)	私の一首	胃甲 節子 (30)
元素	今泉 由利 (7)		伊与田広子 (30)
ハロウイン	弓谷 久子 (8)		岡本八千代 (31)
火燧	青木 玉枝 (9)		小野可南子 (31)
土竜	内藤 志げ (10)	俳句	植村 公女 (32)
秘湯	佐藤 喜仙 (11)		一石 (32)
昼顔の花	林 伊佐子 (12)		喜仙 (33)
二百十日	安藤 和代 (13)		皓一 (33)
待ち疲れた秋	伊藤 忠男 (14)	「歴代天皇御製歌」(四)	貫名海屋資料館 (34)
安堵す	胃甲 節子 (15)	子規の短歌革新とアララギの歌人(5)	佐藤 喜仙 (35)
蓮湯	金津 文枝 (16)	ある自然科学者の手記(7)	大橋 望彦 (36)
拝礼	清澤 範子 (17)	絹の話(25)	今泉 雅勝 (38)
ツイード	伊与田広子 (18)	物理学者と詩歌の世界(35)	今泉 一石 (40)
神無月	近藤 映子 (19)	短歌に詠まれた茂吉	鮫島 満 (42)
差し入れ	半田うめ子 (20)	楽しい時間 1	山本紀久雄 (44)
新しき	杉浦恵美子 (21)	子規の後	夏目 勝弘 (46)
百日草	堀川 勝子 (22)	贈呈誌	岡本八千代 (47)
四耳壺	平松 裕子 (23)	「水魚」のことから(143)	今泉 由利 (48)
リハビリ卒業	小野可南子 (24)	ことのはスケッチ(408)	今泉 由利 (49)
子守半天	山口千恵子 (25)	編集ことごと	今泉 由利 (50)
争ひ	夏目 勝弘 (26)	和菓子街道(74)	平松 温子 (52)
親切な風	秋山 逸穂 (27)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

小鳥らのいくたびか来て朱のいろ透けて明るし虚ろなる柿

P 3

庭のうちに夕べの雨の霽だちてうごくものなしもみぢ葉のいろ

P 7

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

老いながら生くるしるしとわが汗は八万四千の毛穴より噴く

二億年は一瞬にして掌にナウマン象の大白歯撫づ

うちつづく櫛の林はもみぢせり季にしたがふさまのかなしく

北馬場の道^{ばんば}

蒲郡 岡本八千代

男子組女子組と分つ小学生われはつんつんしてゐたりき

男子組女子組の級長君とわれ二人にて帰る時もありたり

君とわれ二人きりにて帰らねばならぬ時あり北馬場の道

われにある願ひごと一つ叶へたまへダチュラの花にさへも祈らむ

わが青年恋人らしき人と来ぬそして帰りぬ嬉しき一日^{ひと}

青年の恋人らしき人と交はす垂れて花咲く白妙ダチュラを

遠きより友の来たれりわが庭は今花ざかりホトトギスの花

語らひて結論なんてあるはずなしやがて愉しく帰りゆくなり

望月の雲間にうすれるその影を仰ぎて今宵の心しづけし

いつの日かまた善きこともあらむかとじつと手をみる誰かのごとく

元素

東京 今泉 由利

十六夜の月と交信するつもりあのことこのこと話の尽きず

取り戻せし時を実感してをりぬ高めの球は最速スマッシュ

各々の元素の重さの異なるを右手に知りぬ両手に知りぬ

十枚の葉っぱ新しい幸福の木の天辺にひと夏の過ぎ

星々と同じき元素を身にもちてペテルギウスを探しをりぬ

朝な朝な鏡にうつすわが姿数多元素の集合体を

肉眼で見ゆるといふアンドロメダ見むとしてをりベランダに出て

二三〇万年前の光りとぞアンドロメダの星雲探す

百キロの上空にして彗星の残せしちりの流れ星二つ

一つ夜を星屑達と遊びをり放射の線は光りとなりて

ハロウィン

豊川 弓 谷 久 子

残暑未だ残れる朝くちなしの季節外れの花の一輪

人住まぬ隣家の庭にたかだかと木立ダリやは蕾を持ってり

台風の日に入りしか静まりしこのひとときの薄気味悪し

硝子戸を打つ風の音秋の風いつしか虫の声も途絶えをり

竹藪も生れし家も失くなりぬ故郷は遠くなりけり

ビタミンC大き二粒飲み込みぬ風邪を治さむまずはそれから

金色に花びっしりの金木犀片へに佇ちて香りさぐりぬ

香を楽しめぬ我が身が悲し風邪引きの我には香らぬ金木犀の花

釣瓶にて井戸水汲みし日もありき釣瓶落しに秋の日落ちる

縁も無き事と思へどみさとよりクッキー届きぬハロウィンと

火燧の

新城 青木玉枝

もたれいし石に冷えびえ肌ざわり冬の訪れ間もなくにして

頭づの上で遊びしつばめも南へと去りて雁のかへり来る朝

青き田と黄金の稲田は何時しかに刈田となりて冬の訪れ

山里は村に一つの診療所優しい顔の医師一人居て

月一度診察と薬の世話になる待つ間のひととき火燧のぬくもり

わが双手何時しか荒れて水仕事始めて味わう食事の支度

村営の花のきれいなバスに乗り鳴沢滝への一人旅

客は私一人だけ一時間の道のりは乗る人もなく終点迄を

終点の鳴沢橋よりしぶき上ぐ秋のひと日運転手さんと

庭に咲く紫の小花名も知らずわが庭の花なり愛しみて朝を

土 竜

豊川 内藤 志 げ

雨を待つ葱の畑はたけをむくむくに土竜の径は縦横無尽

畑はた土の土竜の径に湿れる色蚊遣の煙を試しに流す

流し入るる蚊遣の煙のその先にむくむく動く土竜の動き

むくむくの動きに向ひ土を打つしばし静もる土竜はいかに

つかの間の土の静もり動き出す土竜は径をバツクに速し

やみくもに土を叩きて捕えたる毛並美しあわれ土竜よ

青葱を冬の仕事と次々に一反六畝を今蒔き終へり

台風は東の沖を進むらし待ち待つ雨を静かに降らし

何の穴訝る穴より顔を出す目玉くるくる大きき土蛙

顔を見るそれ丈でよし自からを九十三歳と満面に笑み

「秘湯」

東京 佐藤喜仙

公園に向ふ道なか鴨の声のとよもし我が耳を打つ

昨夜の雨森の大木しとどなり滴りゆたに土の匂へり

秋日差すベンチに孤老コンビニの朝餉と思ふ握り飯食む

散歩車に黄帽の園児六人を乗せうら若き保母の横顔

遠足の小学生散りぢりに木下にかがみ団栗拾ふ

晩秋の那須野が原は渺々と水請のさまに枯れつつありぬ

塩原の出で湯の里に向ふ道谷見下せば白き水筋

秘湯とて名の高かき奥塩原の萱葺屋根の宿に身を寄す

山路を登るにつれて色ませる紅葉の山を分かつ白滝

黄金の穂たれたる畦のその奥の知る人少なき蕎麦屋の美し

昼顔の花

岡崎 林 伊 佐 子

日に蒸れて匂ひ残れる雑草の上に咲きたる昼顔の花

山道の草むらの中にまるぶもの石かと思れば道祖神なり

道祖神の苔衣をとればこの道は右も左も明治の街道

雲ひとつなき青空はまぶしかり育てる蔬菜に散水の日々

ひとりなれば一人の心遊ばせて日陰に休み農耕おもへり

袖口は草汁に汚れひと夏の証の如く野良着を染める

秋耕に出でし百足が昼の陽に虹色に輝やき逃げ行くはやし

畑仕事終へて帰れる電線の雀の啼に夕陽さしをり

秋立つと難聴のわれに蟋蟀の鳴く声真似て夫の告げたり

背に夕陽負ひて草取る大根の畝間に芽生えし実こぼれトマト

二百十日

豊川 安藤 和代

沈む陽が東の雲を染めていく明日は何か良き事ありそう

夕づけば石巻山上月白し二百十日も無事に過ぎたり

雨後の畑太くなりたり茄子胡瓜今宵は酔もみ胡麻和えにせん

風のやや涼しくなりてもこの疲れ医師はただ唯加齢と言へり

看護師のやさしさに心励まされ一週間の点滴終る

伏す吾の枕辺にほっこり湯気立てて孫のつくりたるお粥が香る

老ゆへか微熱つづきて一ヶ月はぜしまゆみが目に痛くしむ

吾病むを知りて隣家の真心よ夕餉の菜が三日も届く

熱の体に巨峰一粒口にする冷えし甘さが忘れずをり

なる様にしかならないと青き空微熱つづきて一ヶ月過ぐ

待ち疲れた秋

大阪 伊藤忠男

夏負けか回復遅き歳なのか風邪気味今も長引きたるや

智力あり気力みなぎる我が友の思い叶わぬ身体齒がゆし

晴れの日も雨も嵐も雷も行く道我は変えること無し

威勢よく神輿揺れる裏通り残暑忘れて秋を楽しむ

雲探し見上げる空は青さのみ乾いた風もこれぞ秋晴れ

窓に耳あてて虫の音聞き分ける外は騒がし秋の長雨

激し雨稲妻光り雷鳴も至福の朝は夢と消えゆく

雲の間にぽっかり空いた青い空覗き見たきや宇宙(そら)の神秘を

草むらにこぞり鈴虫鳴く庭を照らす満月やけに明るき

人は言う残りものには福ありとなのに暑さに益ありやなし

安堵す

豊橋 胃 甲 節 子

豊作の田圃の収穫既に終り今朝の短かき散歩に安堵す

柿畑の柿の色増す艶やかさ台風の被害も無く穏やかに

杳き日に聞き馴れし雉子の声聴けば故無き涙流しつつをり

苦しさに恃め無き身は喘ぎつつ夕餉に添へるキャベツを刻む

晴れ渡る今日は豊橋秋祭り賑はふ人混みを懐かしみ籠りぬ

二度ばかり出でし散歩に摘み来たる薄を活けて身近に楽しむ

成長の遅き四季咲き銀木犀も気付かず伐りしかシルバーさんは

君子らんの大鉢漸く外に出す寒さに当てねば花芽は出でず

秋蒔きの花の種蒔きたり元気良く小さき芽生への忽ち見ゆる

遅咲きのマリーゴールド漸くに咲けば水撒く朝々楽しく

蓮湯

島根 金津 文枝

絵手紙に書きし後の秋海棠を庭に植へにき今花盛り

花芙蓉今年初めて次々と花は大きく白とピンク嬉し

乾燥即席味噌汁セット従兄弟より戴き蜆葱卵等々便利で楽し

夫の今宮中学一級下福井謙一郎先生ノーベル賞受賞の新聞を出して見る

ノーベル賞受賞山中教授の載る朝日新聞も大切に残し置く

一円玉が一gとふ老人は竹飛行機の思出を語る

花廻廊の薔薇園クイーンエリザベスと名札がつけあり

荒神谷の蓮池の花終り葉の枯れも残る池を長男三男と巡り見る

荒神谷の食堂で蓮湯を出されたりしばし味わい戴く午後

写真の整理すれば夫の従姉妹宝塚合格の写真出で来る

拝礼

春日井 清澤 範子

菜園の茗荷終りに近づきて今朝取りたるは花咲きてゐるもの

十月七日八王子神社の祭礼に大のぼり左右に高々と立つ

午後三時祭の儀式は始まりぬ家族三人並び拝礼

役職者に続き拝礼順番に紅白丸餅いただき帰る

神社より貰ひし紅白丸餅を夕食の雑煮にぶり大根と

八王子神社にどんぐり落ちにけり袴つきたるを拾ひ集めつ

時どきに両用眼鏡をふきながら夫とペン持つ居間は良きかな

剪定し一年過ぎたる木犀は十月二十日香り始むる

副作用にて足重たかり吾今日も自転車に乗りスーパ―へ来ぬ

木犀の小花はじけて匂ひたり見上げる空に半月の月

ツイード

豊橋 伊与田広子

雷鳴の轟きたり降り出しぬ雨音激し夜のしじまに

雨音の地面に落つる音からに水面みなもに落つる音に変わりぬ

雨音の水面に落つる音続き暫らく降りて小止みとなりぬ

肌さすと仕舞ひ込みたるセーターを着てみむ今は肌になじむ

古きとて粗末に出来ぬと思ふなりツイードの服何所に仕舞ひしか

純毛のツイードの服なつかしや虫に食はれはしていないかと

カシミヤのセーター常に着てをればひじの破れてまだまだ着たし

古き服大切にせむと思ふなり虫に食はれぬやう注意をせむと

物大切にすべきこと学びたり毛織物に限らず他の物も

寒きなり今年に残暑長続き一氣に冬の来し如くなり

神無月

名古屋 近藤映子

夫見舞ひ一人の帰宅明り付ければガラス戸たたく亀の影

わが夫よ変らず居て下さいと思ひて冷たき手を握る

神無月入りて青空広がれど夫への心配も広がりぬ

わが夫の冷たき手足さすり居てほんのりぬくもる安らぎの顔

わが夫の命は後一ヶ月と医者と言葉は私の地獄よ

わが夫を見舞へば口を半開き我顔ジツト見つめ居る

心付け安々受取り我夫の命延ばすと医者は言わず

教え子等毎年十人余りのお見舞ひはわが夫の宝なり

物言えぬ冷たき夫の足擦りほんのりぬくもる夫の顔見ぬ

われ一人夕日を背に帰り来る夫の顔浮び来て涙腺ゆるみ

差し入れ

新城 半田うめ子

今朝も又寿司を食みをり孫よりの差し入れなりて味のよかりし

庭野にて歌舞伎へと頼まれし孫の出でしは新聞にのり

東の杉林の中ほか今朝もからすのさわぎてやまず

青蛙窓辺にとまり朝つゆのありてよきかと眺むしばらく

元宮の森の中より山鳩の鳴き声のする数羽ゐるらし

西川の川辺を歩き白さぎの舞ひてゐるなり楽しみ眺む

最近の学生やさしく吾のため席をゆずりて電車の中にて

玉ねぎを多く頂く友よりの味のよくして楽しみて食む

夏蜜柑数多に成りつつ藪の中からすは食べぬ柿をねらへり

新しき

蒲郡 杉浦恵美子

我が夫は幾たび乗りし富山行き特急しらすぎ向かひのホーム
蜘蛛の糸に額弾かれ仰け反りぬこんなのに細くてこんなのに剛い
こんなにもやさしく時は流れてる忙しき頃が遠ざかりゆく

この人と歳の差はある経歴も全く違へど話してみるか

新しき出逢ひを一寸面倒と思ふ我が身に少し驚く

厨占めごろんとふたつ独り居は如何に料らむ南瓜に冬瓜

漢字浮かべ南瓜冬瓜並ぶれば一寸愉しい独りの厨

矢作川逆巻き流る鉄橋を電車進みぬ台風近付く

五井山を雲流れゆく台風が近付いてゐる帰心急かるる

トタン屋根撓む音する裏藪も烈しく唸る台風の中

百日草

豊川 堀川 勝子

倒れ臥す百日草を選び分けて明日に咲くべきひと枝剪らむ

疲れ居る眼にすがし庭隅の原種なるらし花アマリリス

未央柳は鉢に茂りに茂れるも今年の花芽の一つも見えず

鉢植糸の小判草また風知草穂花並み立つ吾が庭に秋

音羽川の砂州に生ひ立つ蘆群の穂絮ただよふ季のまた来ぬ

鏡池のほとりに佇ちて子規の句碑読みつつゐれば鐘の音聞ゆ

法隆寺の百済観音に目見えいつ親しきあなたに重なる姿

鏡池の畔に見付けし子規の句碑にお斎知らせる鐘の鳴るなり

柿取りの予定もやめぬ今日ひと日夫も留守なり吾一人晴れ

手づからに柿挽ぎ皮剥き吊し干す自家製干し柿今年も飽かず

四耳壺

豊川 平松 裕子

古文書を読む力なし芭蕉展に芭蕉の使ひし笈オヒを見てをり

この笈を背負ひて各地を巡りしかガラスの内の笈は古りをり

はつか五十年成し遂げ逝きしか松尾芭蕉神か聖か厨子に納まる

偉大さはここにも見ゆる軸装の芭蕉涅槃図といふを見るとき

庭の灯は未だオレンジの光放つ午前六時の明るさの中

すれ違ひし人を思はず振り返る現し世に父に会ふなどなかりしに

車止まる音聞こえたり我が店に客来る気配耳すまし待つ

ぶち割の瀬戸の四耳壺しじこの売れてゆく父が膝に入れ直しぬし壺

父が膝に抱きかかへ直しし瀬戸の四耳壺父の直しを懐しむ客

父の遺品一つ減らして寂しさと虚しさ残り客を見送る

リハビリ卒業

豊川 小野可南子

十キロを歩き得ましたと言う私リハビリ卒業です
ね医師は明るく磯浜の上空ひくく群なして海鷗まどかに何処へ向ふ

自づからテレビ映像に吾も入りぬはるかな尾瀬の秋色のなか

尾瀬ヶ原の木道歩みき共々に労りつつにあなたと私

すすき穂を手に回しつつの寿恵先生五井山頂をお供したりき

カリカリの音のするまで干し上げぬ里芋イモガラ軽々として
かろがる

一夏を水培みずかひ続けし我が夫の里芋ふくよかに大きその芋

来る春を我がプランターに咲かしめむミドリ小さき撫子の芽よ

かほりくるは何処いずへ辺へにあらむゆきあひぬ二尺ばかりのこの銀木犀

十三夜の月のひかりの明々めいめいと我が庭隈のバラも紅々

子守半天

豊川 山口千恵子

足元に寄りてまつはる野良の猫無視して帰る昼近き畑

夏の間鉢の植木にかけし巢に集ふがごとく蜂は動かず

何処にか行きてしまひぬ足長蜂植木に空の巢を残しつつ

畑隅に今年も咲けるコスモスを通りすがりの人に誉めらる

白と桃の花びら風に揺れてゐる墓に供へしコスモスの花

たんねんに縫ひたる針目ほどきゆく姑ははの手なるる子守半天

孫負ひて愉しげなりし姑はは浮かぶ赤き花柄の子守半天

若き日のわだかまりなども思ひつつ姑ははの縫ひたる半天ときゆく

中学生親善使節団にて発たつひな子トランク引きゆく車輪きませ

キュパティーノのステイ先にて飯炊くと水加減などをわれに聞きくる

争ひ

豊川 夏目勝弘

曇り日を待ちて庭師の仕事を始む一日家に居るのも疲れる

顔のみは覆ふあたはずたちまちに寄り来る藪蚊の飢ゑてやおらむ

羽音さへたたぬ小さき藪蚊どもはつかに出づる素肌に止まる

衰へぬ太陽さけて日影より動かす手にも藪蚊は止まる

幾匹の小さき命を殺しつつ今日の予定の庭師を終へる

植込みに蜂の巣多き今年なりたがふことなく台風襲ふ

坪ほども無き庭草を取ること除草剤を頼りてしまふ

それぞれの命と戦ふが定めとも親子が殺し合ふも定とするや

殺さるるその一瞬に目覚めたり夢のなかにも争ひがある

争ひのなき世は永久に願ひのみただひたすらに願ふも永久に

親切な風

「招待」 秋山逸穂

夕立に降られて入りし軒下に風吹きくれば傘役たたず
石畳の細きすきまの円き穴に蟻は列なし砂糖を運ぶ
豪雨にて飛沫のあがる国道を濡れるがままにランナー走り去る
堀端の石道ゆけば水面には真鯉の背鰭いくつも見ゆる
歩道にて手摺りにもたれ歌集読む親切な風頁をめくる

浄願寺

豊川 白井信昭

幼き日学校帰りの寄り道は静誠尼の浄願寺なりき
沖合を自動車運搬船のゆるりゆるり大島小島ゆ
車窓より雪なき富士を仰ぎみるその麓を今通りゆく
混み合えるケーブルカーは急勾配三十一度一八分に差し掛かる

留学

横浜 阿部 淑子

夏過ぎて色うすれゆく道の端の未だ咲けるよ朝顔の花
池の鯉小さき波紋をつくるとき金木犀のふっと香りぬ
インディアナよりの孫の便りをくり返し読みつつ想う努力の姿
エメール小さな文字で満たしゆく日本の秋を留学の孫に
万能の細胞生みて人々を無限に救はむ価値ある賞ぞ

猫ジャラシ

東京 富岡 和子

大毛蓼垂れる穂先にしじみ蝶雲なき空の台風一過
木犀の小花散り敷くポスト前友の快癒を願う絵葉書
どこことなく木犀香る幹線路日陰をさがし信号を待ち
猫ジャラシ歩道のみぞに自生して若者たちは靡かせてゆく
石だたみ黒塀残る神楽坂毘沙門天の出店の穂穂

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

学友の故郷津山の天守跡われもここより町を眺望す

鈴木美耶子

咲き群れる秋海棠は子規の花東の門かどより靴音聞こえつつ

吉見幸子

暗闇の男山をとこやま下る御鳳輦列尾ごほうれんにてかかげる我が高張り提灯

牧原正枝

初咲きのホトトギスの花のつつましさやはり子規をば重ねみてをり

岩瀬信子

帰りくればまづ一口の熱き茶を飲みし夫とのかの夜々よ

石田文子

石垣に咲く彼岸花見つ登る大垣城は四重よへにま白し

山崎俊子

初孫の泣き声はげしわれ抱きていつもの童謡の「ねんねんころり」

牧原規恵

わが検査「異状なし」との結果なり帰りの道に口紅一つ

三田美奈子

夫と我「しらすぎ」に乗り北陸路へ新しきスニーカーお揃ひにして

稲吉友江

私の一首

少しばかり定家葛の花見へて小さき喜び胸にあふれぬ

胃 甲 節 子

久しく散歩に出る事も出来ず、窓の外を眺めるばかりで、見馴れた神田川の堤防や、牟呂用水の森に咲く花々を恋しく思っておりまして。穏やかな夕方あの花此の花は咲いたかと杖を携みに、ゆつくりと少し歩いて、みましたが既に花は全部終わっていて、がっかりしましたが、いつも定家葛の花が咲いていた所迄行ってみましたら、まだ残る花達が可憐な花を咲かせ甘い香りを漂わせており、嬉しさに気持ちをこめて、一首と致しました。

われも一度登って見たきと思ひつつテレビに見入りぬスカイツリー 伊与田広子

スカイツリーが完成した頃は、よくテレビで放映しておりました。大勢の希望者で入場者の制限もあり、入場券が発行された様です。私も行って見たくなりました。もっと近ければ行って見るのですが、新幹線まで使つて見に行く気にならない。考えて見ると人々の好奇心を誘っていると思う。名古屋にテレビ塔が出来た時もツアーがあり参加しましたが、前を通つても再び登ろうとはしない。

東京鎌倉への旅に外から見るだけですが登りたくなるかどうか？

風吹かば部屋に通^{かよ}へるけふの風竹管の風鈴にけふの音して

岡本八千代

七里ヶ浜の友だちから、インドネシアの竹の管で作った風鈴を送ってきた。手紙には「風の・通り・みちに吊るしてください」とあった。

『風の通りみち』ということばに私は魅惑を感じた。さっそく、そのテーマを決めて数首の歌にした。その中の一首である。

その竹管から風が吹いてくる度にカラコロと鳴る音がする。その時その時の風によって、音はそれぞれだ。無風の時は音はしない。今日吹く風の音は、ああ今日の音だなと思った。

開きはじめの蓮はつすの花をのぞき込む実となる形の黄に輝く

小野可南子

夏のはじめ、菩提寺御堂前に住職の手による蓮の花鉢が並んでいる。私の朝は、祖のお墓に詣で供華の水替えと手入れて始まる。この時期、蓮の花は一番の楽しみであり、その朝は丁度一輪の開花の刻に出合えた。

そつと覗きこむと花の中央に角張った花托・、その透きとおった黄緑の中から小さな妖精が立ち出でてくるかと思ふほどの耀き、一瞬息を止めて見惚れていた。下の句「実となる形」として一首としましたが、それが「花托かたく」という名称があることは、後になって知りえた知識です。

『俳句』

秋冷や狸囃子の行進曲

植村公女

金木犀こそこそ咲きて風ゆたか

オノマトペア迷ひてをりぬ小椋鳥

遥かなる進化の旅路赤トンボ

一石

外来の野草に勢ひ花野かな

新たなる気持になりて落葉踏む

送り火の消え現世にまた一人

喜仙

なかなか手ばなせぬもの秋扇

一人居の消えぬ夜更けの秋燈

山茶花の咲きはじめてたり今朝三花

皓一

秋空に剣道の気合舞鶴城

さわやかに挨拶される故郷よ

「歴代天皇御製歌」(四)

貫名海屋資料館

『仁徳天皇』(第十六代) 在位三三三—三九九

仁徳天皇は、応神天皇の第四皇子。

朝鮮半島に出兵され、百濟と新羅を従え、高句麗と対戦された。半島に「任那日本府」を置かれ、日本が統一国家と備わったことを内外に示された。

人家のかまどから炊煙があがらないことに気付かれ、租税を免除し、宮殿の屋根の茅替えもされなかつたほどの仁政をされ、「仁徳」と由来する。

好色な天皇として皇后の嫉妬される一面もあられたらしい。

大阪堺市の百舌鳥耳原中陵に葬られた。

沖方には 小船連らく くらぎやの まさづ子吾妹 国へ下らす

天皇は、海部直の女を喚上げ(宮中に召し入れ) 皇后は大きく怒りまして、追ひ下し： と詠まれた。

おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば 淡島 自凝島 擯榔の 島も
見ゆ 放つ島見ゆ

天皇は「淡路島を見る」と口実に行幸をし海部直の女を追いかけて： その時の歌

子規の短歌革新とアララギの歌人(5)

佐藤 喜仙

(二) 新聞「日本」入社まで

明治十七年九月東京大学予備門に合格した子規は、政治をあきらめ哲学に傾注していった。明治十九年大学予備門は第一高等中学と改称され、ここで子規は生涯の畏友、夏目金之助(漱石)と知り合い交友が始まっている。明治二十三年七月、第一高等中学を卒業。

九月に帝国大学の分科大学(後の東京帝国大学)哲学科に入学。漱石は英文科に進んだ。

だが前年の明治二十二年に子規の生涯を決めた大事が発生している。五月九日の夜突然咯血をしたのである。その後一週間のあいだ、毎日五勺ほどの咯血が続いたとのことであるから、かなりの重症と言えよう。当然子規の受けた衝撃も激しいものであった。母方の親戚で子規が師とも父とも頼った服部嘉陳なる人物が折悪く松山に帰郷することになり、子規の心細さはさぞかしであつたらう。別れに際し「ほととぎすともに聞かんと契りけり血に啼くわかれせんと知らねば」の歌を書送って

いる。又咯血が五月だったことにより「卯の花をめぐけてきたかほととぎす」の俳句を詠んでいる。ほととぎすを現す漢字九種類の中から「子規」を号にしたのはこの頃ではなかったか。

当時肺結核はきわめて重篤な病気であつた。

咯血がおさまらぬため、医者のおすすめに従つて子規は七月三日に東京をたち松山に帰省し、九月二十五日迄滞在した。だが完治したわけではなく宿痾となり子規早世の原因となつたのである。

文化大学哲学科に入学したものの、子規の心の内は哲学より文学に大きく傾注していた。

その結果、翌二十四年二月国文科に転じている。

ここで子規の歌集「竹乃里歌」についてふれておきたい。本来の「竹乃里歌」の歌稿は、半紙縦二つ折りの袋綴、二百四十八枚を紙捻綴した冊子で、表紙の「竹乃里歌」の文字を始め全内容が子規の自筆によつた。短歌千九百三十三首を中心に若干の長歌・施頭歌・新体詩・端唄が墨筆をもって記された遺稿であつた。刊行物になつたのは、明治三十七年「子規遺稿第一篇竹の里歌」としてでありその後数回に恒り刊行されている。

ある自然科学者の手記 (7) 大橋望彦

「最近のiPS細胞のトピックスから」(2)

当然のこととして、次に大きな課題が生まれたのである。それが生殖器の中で作られる生殖細胞の基になる細胞、始原生殖細胞が果たして出来るかどうかである。精子や卵子が出来る時には、必ず經由する過程に存在する始原生殖細胞は、体細胞の中でも特に特殊な分化の形態を持っているので、この細胞を作ることは将来新しい個体を作るために通らなくてはならない難問がそこにあった。特にiPS細胞はその元であった個体に戻したときに、免疫的に拒絶反応が起らないことが期待されていたが、マウスの実験で実際には拒絶反応が起きてしまった報告がある。然し一方では、やはりマウスの段階ながら、ES細胞から脾臓でインシュリンを産生する細胞のランゲルハンス島の細胞に分化させることに成功し、この細胞をマウスに戻し移植をしたところ高血糖マウスの血糖値を低く保つことに成功したと言うこと

も報告されている(2011.2.6..朝日新聞)。

このような状態にあつて、その作り難い卵子の始原生殖細胞の作成に成功し、その始原細胞と天然の精子を受精させて母体にその受精卵を戻したところ、正常な産子(仔)を得ることに成功した。このことが表記の新聞誌上で大々的に報道されたのである。実は、既に始原生殖細胞より精子の作成は成功しているのも、完全な人工誘導によるES細胞由来の個体生物が出来るのも夢ではなくなるであろう。現在は、人工的に体外受精は出来ても、個体を作ることは制限されているので将来のことではあるが。科学の進歩は超特急で進んでいる。次にはどんな夢を見るのだろうか。夢を追うのに忙しくなるのでは……。

以上、ES細胞について、簡単な言い回し方で解説を試みたが、実際には並々ならぬ努力と、緻密な実験計画、多くの経験(失敗を含め)が有って初めて成功したのであり、この研究の進展の速度には眼を見張るものがある。

現在、日本の研究は先端を切つて行なっているが、世界各国で、新しい技術開発が進み、多くの新しい

知見、事実も判明するであろう。例えば、動物の体細胞を用いて、ヒトのES細胞の代替細胞として大量に生産することが出来、それを用いて、創薬の研究、再生組織、細胞の利用に基づく不妊治療、老化で失われた細胞の代替細胞の作成、それこそ、高齢者の痴呆症の治療に、脳組織の修復等、考えても切りが無い。然し、そうなると、しつかりとした倫理概念も十分検討することが当然ながら要求されてくる。

先に五回に涉って述べてきた「DNA鑑定雑感」でも、生殖細胞のリコンビネーション（組み換えDNAの作成）過程に基づく個体差の成因が、このES細胞を用いた研究にも大いに関係してくる。即ち、最近作られているクローン生物には、このリコンビネーションの機構がスキップしていることから、殆んど個体差の認められない個体が複製されることが知られる。それに比して、ES細胞由来の精子や卵子を作成する過程では、天然と同様に始原生殖細胞を作る過程が含まれており、それから減数分裂を繰り返して精子、卵子が形成されるので、当然ながらその過程でリコンビネーションが行なわれ、それぞれ

僅かながら異なったDNA遺伝子を有する個体が行われる結果となる。このため現在では精子や卵子まで作られる確率は未だ非常に低いのが実情であるが、従って、この過程の解析が進めば、個体差の成因の解析がより詳しく判明する筈であり、生産率も上昇するであろう。そのような解析が進むと、DNA鑑定もより精度の高いものとなり、DNA治療の制御の仕方も可能性が高まるに違いない。夢は膨らむ一方で、色々な厚い壁も増えることであろう。それに挑戦するのが自然科学者の宿命でもあるであろう。やはり期待は増してくる。研究の益々の進展を見守りたい。

以上

この文を書き終え、脱稿したと思ったときに、京都大学の山中伸弥教授が今年のノーベル医学生理学賞を受賞することが決まったと言う報道が流れてきた(2012・10・8/8:30pm)。

さもありなん、宣^{むべ}なるかな、と思うと同時に、まるで自分が受賞したように感激し、嬉しく思えた。明日の朝刊は大変であろう。

絹の話 (25)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の機能性 その2 (絹を食べる)

絹を食べると身体に良く、それに因る諸問題も起こらない事が判ると、色々な絹添加食品が出て来ました。

その初期の傑作は何と言っても、小豆島の「絹入りうどん」でしょう。真空パックの半生うどんは従来の賞味期限が90日でした。絹入りになってから180日表示になったのには驚きました。絹の防腐効果と保湿性が認められたと思えました。販売期間が2倍になる事は、製造者側にとって、実に経済的なことです。いくつか買い求めて日をおいて食べてみました。柔かい様で喉越がよく、讃岐うどんの様にしこしこしていて、シルクにほんの少し含まれるグルタミサンのせいかな、旨味を感じました。残った煮うどんを翌日たべてみると、少し腰が柔らかくなっていました。タラタラにならず美味しく食べられました。以前、「絹入りのし餅」を作った時、いつまでも乾かず葉を煮やして四角く切ってみました。角が丸

みをおび、角餅が出来ませんでした。それを2ヶ月放置しても弾力性が有り、小さなひび割れに数日後に生えた青カビ、黄カビがその後殆ど成長して来なかつた事にピタリ符合しているので、大いに納得した次第です。

それだけではありません。大きな粒子は腸壁から吸収されず、脂肪と一緒に排泄されますので肥満予防になります。小さな粒子は吸収され、いち早くアルコール代謝を促進しますので、二日酔い防止になります。さらにインシュリン分泌を促しますので糖尿病予防に効果的です。痴呆進行抑制にも効果が有ると言われますが、確かな実証は有りません。また手や首の筋肉が一部だけ緊張して震えが止まらない人にも効果があるようです。コラーゲン減少にも少しばかり役立っている様です。更に大腸癌予防にもよい事は定説になりつつありますが、積み重ねた臨床実験が少なく、実用化は暫くさきの事になるでしょう。ごく最近の研究では癌細胞の分裂を抑止するのではないかと言われますので、大腸癌以外にも効果が無いだろうか研究が進んでいます(この事はもう少し詳しく別記します)。

この様に書くと、絹を食べればたちどころに厄介な難病に効きそうですが、そう簡単では有りません。

絹の粒子はその大きさとで發揮される効果が著しく変化します。また食味感も異なります。粒子が大きすぎても、小さすぎても味の素をなめた様な味と少しの甘みを感じます。食品に3%以上添加するとその匂いに拒否感を示す人が出て来ます。なるべく沢山添加した機能性食品を提供したいのですが、美味しくなければ食品としては落第です。その解決の為に少量添加の物を長く、複数食べて頂くか、その匂いを消す香料等を加える方法を考えています。粒子の大きさに依っては無味無臭になります。昨今高級ケーキ等に添加して、乾かなくしつとり感が持続し、とろける様な食味感で人気を博しているケーキメーカーもあります。ただこのパウダ大変高価なので一般食品には少々難しいようです。

今日一般に販売されているシルクパウダは加水分解か酵素分解された物（粒子が小さい）または磨り潰したものの（粒子が大きい）で、¥20000/100g前後で市販されています。

健康の為にこれを直接飲んだり、料理に使ったりする人も増えて来ましたが、それぞれの期待される効果に合致した粒子の大きさではないので機能性効果は半減以下になりますから長期に渡って利用する事をお勧めします。ただ香りを大事にする物に添加するとシルクが匂いを吸収して香りが薄くなりますので、紅茶や手打ちそばなどは避けて、ヨーグルトや濃い味の煮物などに使う事をお勧めします（防腐効果も有りますので、日持ちがよくなります）。目安は2g/1日（小さじ1杯）。2〜4ヶ月で血糖値は低下して来ます。低下すると安心して摂取を怠りますとまた元に戻ります、その間に食生活を改善する必要があるでしょう。

絹を食べると云う事が二十年以上経過した今日でも一般のコンセンサスを得る所迄来ておりません、絹入り食品から撤退する企業も出て来た事は寂しい限りです。もつと夢の有る美味しい物を開発しなければなりません。

物理学者と詩歌の世界 (35)

一石

マックス・ボルン

マックス・ボルン (Max Born, 1882-1970) は、ドイツ生まれのイギリスの理論物理学者。量子力学の初期における立役者の1人である。1954年ノーベル物理学賞を受賞。

ドイツ東部シュレージエン地方のプレスラウ(現ポーランド領ヴロツワフ)でユダヤ系の企業家の家庭に生まれる。チューリヒ大学、ゲッティンゲン大学などで学んだ。1919年からベルリン大学助教となり、フランクフルト大学を経て、1921年ゲッティンゲン大学の教授となる。1926年量子力学の確率解釈を発表(注1)。またR・オッペンハイマーと共に、「ボルン・オッペンハイマー近似」と呼ばれる近似法を編み出す(注2)。1933年にはナチス・ドイツのユダヤ人排斥運動により、ボルンは教授職を解雇された。その後、渡英しケンブリッジ大学講師・エディンバラ大学教授に就任する。第二次世界大戦後の1953年にドイツへ帰国。1954年、量子力学、特に波動関数の確率解釈の提唱によりノーベル物理学賞を受賞した(参考資料1)。

1904年、ボルンが学んだゲッティンゲン大学には

F・クライン、D・ヒルベルト、H・ミンコフスキーなど当代きつての数学者が活躍していた一大中心地であった。ボルンはこれら数学者にその能力を評価され親しく交流した。

ボルンは教育者・指導者としてもきわめて優れ、多くの弟子を育てた。門下には、W・ハイゼンベルク(参考資料2)、V・ノイマン(参考資料3)、W・パウリ(参考資料4)、R・オッペンハイマー(参考資料5)、M・デルブリュック(参考資料6)ら錚々たる物理学者が名を連ねた。多くのユダヤ系物理学者が亡命を余儀なくされるまでは、ゲッティンゲン大学は理論物理学の一大拠点であった。ボルンには以下の著作がある。

M・ボルン、『現代物理学』(みすず書房)

M・ボルン&E・ウオルフ、『光学の原理 1 電磁光学および幾何光学』・『光学の原理 2 干渉および回折』・『光学の原理 3 コヒーレンス理論、金属および結晶光学』(東海大学出版会)

ボルンについての逸話を挙げる。

○教え子のデルブリュックと彼の助手を勤めた6人(E・フェルミ(参考資料7)、W・ハイゼンベルグ、M・ゲッペルト・マイヤー、G・ヘルツェベルグ、W・パウリ、E・ウイグナー)がノーベル賞を受賞している。

○ボーアとアインシュタインの間で、量子力学の解釈をめぐって論争が長年にわたって続けられた。1926

年にアインシュタインからボルンに送られた手紙の中で、彼は「神はサイコロを振らない (Der Alte würfelt nicht.)」という言葉を用いて量子力学の解釈を批判している。

○マンハッタン計画による原爆開発にはボルンの門下生の多くが関わっていた。オッペンハイマー、フェルミは直接的に、また理論面(量子力学、原子核物理学)で間接的にV・ノイマン、E・テラー、M・ゲッペルト・マイヤー、V・ワイスコプフ、E・ウイグナーなどが関与した。ボルンは核兵器には批判的であったが、⁸⁾そうするしかなかった (It might be the only way out) ⁹⁾と述べている。アインシュタインとの親交も厚く、ラッセル＝アインシュタイン宣言 (B・ラッセルとアインシュタインが中心となり、1955年に第一級の科学者ら11人によって、米ソの水爆実験競争という世界情勢に対して提示された核兵器廃絶・科学技術の平和利用を訴えた宣言文) ¹⁰⁾にも名を連ねている。○孫の1人にイギリス人歌手のオリヴィア・ニュートン・ジョンがいる。

注1・量子力学はハイゼンベルクによる行列力学 (1925) とE・シュレーディンガー (参考資料 8) による波動力学 (1926) の2つの定式化があったが、間もなく両者は数学的に等価であることが証明された。行列力学の構築にはボルンも

大きく貢献した。一方、波動力学に現れる波動関数が、どんな電子の波なのか「解釈」の問題が生じた。「電子は波」というシュレーディンガーの主張は、電子の干渉実験と明らかに反していた。ボルンは「確率」という考え方を問題の解決に利用し、波動関数は電子の存在する確率波であるという解釈を提唱した。こうすると干渉実験の結果は、うまく説明できるのである。この「ボルンの確率解釈」はその後の量子力学の標準的な解釈となった。

注2・ボルン＝オッペンハイマー近似は分子を量子力学で扱うための処方箋で断熱近似とも言う。量子化学において原子核の動きに対し電子が即座に追従できるとした近似。現実の化学反応等では、このような近似が成り立たない場合もある。

参考資料

- 1) The Free Encyclopedia Wikipedia “Max Born、
- 2) 三河アララギ、P 36、第57巻、第11号 (2010)
- 3) 三河アララギ、P 36、第58巻、第11号 (2011)
- 4) 三河アララギ、P 36、第58巻、第3号 (2011)
- 5) 三河アララギ、P 36、第58巻、第1号 (2011)
- 6) 三河アララギ、P 40、第59巻、第11号 (2012)
- 7) 三河アララギ、P 36、第58巻、第5号 (2011)
- 8) 三河アララギ、P 36、第57巻、第8号 (2010)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

佐藤春夫

佐藤春夫（明治二十五―昭和三十九）は、「スバル」終刊後にその後継誌の形で大正三年に創刊された「我等」創刊号に、「歌集『赤光』を読みし日」と題する短歌十首を発表している。なお、このうち九首には「茂吉」の名を詠み込んでいる。

うれしきは茂吉が歌ぞそをみれば茂吉が呼吸をさく
ここちする

折しあらば逢ひて茂吉と語りせんかただに歌をのみ
みてありせんか

足乳根の母をうしなひ深深ふかふかに山かげの湯になげく茂
吉は

をさなかる万葉集の本末もとすへを茂吉は深くまねびぬ深く
くれなゐにふかくもしみて汝が歌をわれはちまたに
口すさみゆく

色朱き茂吉がうたの集をとり弟いづとにみよとわたしけるかも

春夫がこの歌を作ったのは、『赤光』が出版された直

後である。一首目には、たちまち世に知られてゆくこの歌集に受けた感銘を詠んでいる。与謝野鉄幹に師事し「明星」「スバル」の作品に親しんでいた春夫には、茂吉の「呼吸をさくこちする」歌が衝撃的だったのである。実は、この「我等」一号に春夫は担当した新刊批評の中で『赤光』をとりあげてもいて、「いい歌集だ。甚だいい歌集だ。作者はひとりのたのしみのために正直に、ただ彼の欲するがままに彼の四周を見まはして、ひろびろとした心でその折々の心持をよみすてた。」歌などといふ形式に、無暗と複雑な近代的熱情の要求を絶叫する、喧しく馬鹿馬鹿しいわからずやの多い今日、この民俗の古い一形式の意味をほんとうにのみ込んで居るまれなる人」である。と絶賛している。ここで誰しも、芥川龍之介の「僻見」の言葉の数々を思い出すであろう。「僕は高等学校の生徒だつた頃に偶然『赤光』の初版を読んだ。『赤光』は見る見る僕の前へ新しい世界を顕出した。爾来僕は茂吉と共にたまじやくしの命を愛し、浅茅の原のそよぎを愛し、青山墓地を愛し、三宅坂を愛し、午後の電灯の光を愛し、女の手の甲の静脈を愛した。」僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になつたのでもない。斎藤茂吉にあって貰つたのである。もう今では十数年以前、戸山の原に近い借家の二階に『赤光』の一卷を読まなかつたとすれば、僕は未だに耳木菟のやうに、大いなる詩歌の日の

光をかい間見ることさへ出来なかつたであらう。「且又茂吉は詩歌に対する眼をあけてくれたばかりではない。あらゆる文芸上の形式美に対する眼をあげる手伝ひもしてくれたのである。」などの言葉を。

二首目には、『赤光』の作者に会いたいということが詠まれている。春夫は、昭和三十八年に出した『詩文半世紀』の中で、「書評を喜んでくれたらしい著者が、わたくしに会いたいと申し出て、当時彼の勤務していた巢鴨病院の宿直に日に来てくれないかというのであった。」と書き、一時間あまりの会見のようすを展開している。春夫は、茂吉が書評を喜んでくれたらしいと書いているが、この二首目の歌も茂吉を動かしたものと思われる。

三首目は「死にたまふ母」(『赤光』)の、「火の山の麓にいづる酸さんの温泉おんせんに一夜ひたりてかなしみにけり」を讀んでの詠嘆である。

四首目は茂吉が万葉集に深く学んで血肉にしたことを詠む。春夫は『赤光』批評の中でも、「万葉集の系統を真一文字に引いて、彼には何の虚飾もない。(中略)彼は万葉集の形式から入つて終にその精神を学び得た人だ。」と述べている。

五首目には、茂吉の歌を「ちまたに口すさみゆく」とあるが、春夫は「アララギ」の「赤光」批評号(大正四年四月号)に、「事実を云へば、私は『赤光』を通読す

ること五度を下らない。最も好きな数首に至つては、何ごころなく口の上つて、語調の自然的誇張を許さるるならば、殆ど一日三誦一誦三嘆と称していい。」と書いた。六首目の「色朱き」は『赤光』の表紙が朱色であることをいう。

後年、春夫は、旧版『斎藤茂吉全集』第二十二卷の「月報」(昭和二十八年)に、「文化勲章を受けられた祝賀の会には久しぶりに温泉に接する事が出来るかと思つて出席したが終に出席がなくて失望し且つ病状を案じてゐたらその後、古稀自祝といふのでのしをつけ赤い紙で帯をした紙包に

枯枝の秀枝爾

安り而鳴きそめし

棕鳥婦たつ春

呼ぶ羅しも 茂吉

と掌大の文字を四行に書かれた横物の筆蹟を恵与された。」と書いている。茂吉が文化勲章を授与されたのは昭和二十六年、七十歳のときであった。その祝賀会は翌年四月だったが茂吉は体調不良のために欠席した。右の歌は訓みくだすと「枯枝の秀枝にありて鳴きそめし棕鳥ふたつ春呼ぶらしも」となる。『赤光』を讀んで以来、春夫は終生茂吉を尊敬し、茂吉も春夫に厚意をもって接したのであった。

楽しい時間 1

山本紀久雄

食事にはいろいろな食べ方があり、味わいも異なり、食する時間もちがう。

先日のアメリカ・シアトルでは、「食べないと明日に影響する」という、強いられる食事の時間を過ごした。サンフランシスコからワシントン州シアトル・タコマ空港に着いたのが21時半過ぎ。アメリカの国内エアでは食事が提供されない。その代わりに客室乗務員がEATSと書かれたメニューを持ってくる。開いてみると簡単なサンドイッチでも、けばけばしい写真の横に6・50ドルと10ドルとある。とても注文する気がしない。

バックを持ち、タクシーで市内中心のホテルに入ったのが22時半過ぎ。ホテルのレストランは既にクローズされている。フロントに紹介された近くのレストランに行くと、店内は暗く、アルコールを楽しむ人でいっぱい。暗くてよく読めないメニューだが、一応、食べるものはある。適当にオーダーし、アルコールなしで食べたが、味は関係なく、空腹を満たすという強いられた食事だった。翌日のシアトルでは「とても美味しい時間」を経験した。

翌朝10時、車のフロントガラスの向こうに、富士山に似た山が見える。レーニア山である。標高4392mの火山。この地に暮らす日本人・日系人からは「タコマ富士」と呼ばれている。この姿を見ながら、ワシントン・ステート・フェリーからベイブリッジ・アイランド行きに乗っ



た。フェリーは約30分でアイランドに着く。島を突っ切り対岸のフッド運河ブリッジを渡り、104号線から101号線に出て下がり、世界遺産のオリンピック公園手前のキルセンにある訪問先を訪ね、シアトルに戻ったのは18時。

戻りのフェリーから立ち並ぶシアトルのビルディング見ながら、その中にあるSHROS 寿司店に電話し予約する。このシロース寿司は予約なしで行くと、店外で待つことになるほどの人気店。ここでクマモトオイスターと牡蠣フライ、勿論、寿司も食べ、とても美味しい時間を過ごすことができた。ところで、毎月第二土曜日の14時から「楽しい時間」を過ごしている。

京浜東北線の蕨駅西口から歩いて7分、そこに「いーとぴあ」料理教室がある。向かいのスーパが経営している、この「いーとぴあ」については後日詳しくふれたいが、この辻照子先生「マナー&パーティーコーディネート」に何年も通っていて、いつも「楽しい時間」を体験している。

まだ夏の暑さが残る10月13日の土曜日、教室に入ると、既に何人もテーブルに座っている。殆どの人とは顔なじ

みであるが、毎回、新しい人もいて少し緊張気味の様子。ここでの「楽しい時間」の主役は、勿論、料理とマナーを語る辻先生である。

14時になると事務局の和田さんが登場し、これから辻先生の教室を開講しますと、笑顔の明るい声とともに、一言挨拶がある。これが楽しい。和田さんの魅力は後日詳しくお伝えする予定。

さて、辻先生は、どのような料理指導を展開するのか。それを詳しく述べ出すと、制限された字数では足りない。でも、これも後日少しずつお伝えしていきたいが、今日は最初からビックリ、新人は目を丸くする。

何とシャンパンの登場である。アペリティブである。実は、ここが辻先生のマナー教室のポイントなのだ。

日本人は「とりあえずビール一杯」から始まるが、フランスではアペリティブから。アペリティブとは食前に飲む「ドリンク」のことを指すが、それ以上に「食前に軽く飲みながら、のんびりおしゃべりを楽しむこと」を意味する。

この習慣がいつ始まったのか定かではないが、古代エジプトが起源だと言う説もあるほど。語源はラテン語の「apetivum」＝「開く」で、16世紀頃のヨーロッパでは純粹に食欲増進・消化促進の医療法のひとつで、そもそもは消化を助けるため食前にハーブやスパイスを使ったスプリットを飲むことを意味していた。しかし、その「消化のため」という意味は徐々に薄れ、18世紀ごろには食事の前に何かを飲みながら社交する、ということへと目的が変わってきた。今では6月第一木曜日が「アペリティブ

フの日」となっている。

ということ、フランス在住経験豊富な辻先生は、料理作りの前に、まずはシャンパングラスでアペリティブという仕掛けを講じたわけ。

始めて参加した人はビックリ仰天。それはそうだろう。料理を学ぼうと来た始まりにシャンパンとは、他の教室では考えられない。

なお、シャンパンには気をつけたい。一気に飲み乾してはいけない、度数が10度から12度もあるから、結構酔う。したがって手許の包丁さばきに影響する。

ここで今日の料理メニューを紹介したい。辻先生の料理は基本的に三品。

- ① チキンのハーブ焼き
- ② ポテトとズッキーニのアンチョビ風味
- ③ 根菜マリネ

辻先生の料理コンセプトは「作りやすく、気が利いている」ではないかと推察しているが、いずれ辻先生から公式コメントをいただいて、それを皆さんに紹介したいと思っている。

ところで、今日の教室で自分が学んだことは「短冊切り」である。自宅で調理する際のごほうと人參の切り方、いつも正方形か長方形。なるほど、このような切り方もあるのか。知らなかったのが恥ずかしいが、考えてみれば外食先でよく見かける切り方だ。

加えて、辻先生が強調する。「皮を剥かないで切ってください。皮と身の間に一番栄養分がありますから」。これにも改めて成程と思う。

子規の後 夏目勝弘

子規の後の伊藤左千夫から長塚節への手紙から、二人を通して子規を見てみたい。

左千夫から赤木格堂にあてた、明治三十五年九月二十四日の手紙のなかの、長塚節に関係あるところを記してみる。

千三百余字の長い手紙の最後を要約すると、九月九日に節が左千夫宅に来る、二人で根岸へそして近來になく色々話しをし笑った。

子規はその翌日から次第に悪くなり、長塚節は十五日まで居て帰る。

十九日左千夫からの子規の死を知らせる電報を受け、通夜から初七日まで終へて帰る。

そのことを左千夫は（長塚は運のよいやつじゃ）と赤木格堂に書いている。

ちなみに赤木格堂が子規の死を知るのは九月二十四日である。左千夫からの手紙が三日後に届いたため。こんなことでは用はたせぬと郵便の遅れを左千夫が歎いている。

九月三十日左千夫から節への手紙は、子規の遺族のこれからの生計費のこと。

生計費は二十円が必要である。長塚節には月々一円を向三年承諾願いたいという手紙。

左千夫全集第九卷（書簡）の通数は、明治十四年から大正二年まで一六六通うち長塚節あては二〇三通。

子規死後三五年九月十九日から大正二年一月一日まで一六〇通ある。

ちなみに長塚節全集の書簡のなかには、左千夫あての手紙は三十一通しかない。それも旅先より当地の絵ハガキで出したものが二十六通。子規の死後はすべて旅先よりの絵ハガキである。左千夫と節との関係を手紙より見る場合、左千夫からしか

知ることが出来ない。

明治三十五年十月三十一日消印の手紙に。

（略）僕は先生の「一語山の如く信す君はできないのが不思議（以下略）」とある。

明治三十六年四月二十二日消印の手紙に。

「馬酔木」の発行の決定の知らせる内容、

（略）

一、名称 馬酔木。

一、発行 六月五日

一、五月十日迄に原稿送付の事

一、編輯會は五月十二日

一、費用は 第一號分

蕨 三十五圓

岡 三十五圓

伊藤 二十圓

節にも二月二十一日の手紙で応分の出費をとあるも、この手紙に（君の先便委細の事情如何にも同情に堪え不申候）とある。

この後の節あて手紙は、費用の不足のこと原稿の集まらないこと、編集のこと等々「馬酔木」に関するものが多い。

そして明治三十七年一月号は二月二日となってしまった。三十八年三月八日まで長塚節への手紙がないが、馬酔木に苦勞する手紙が続く。

馬酔木も毎月発行できなくなり、明治四十一年一月十日終刊号発行。三十六年六月号より三十二冊が刊行された。

明治四十二年七月十七日印の長塚節への手紙に、アララギを東京に移し毎月必ず一冊を発行することを決定したむねを知らせる。

長塚節より明治四十四年十二月六日の岡三郎あての手紙に（昨日入院仕り候）とある。

入院先は子規庵のあった隣町中根岸町の根岸小学校と円光寺の中間にある根岸養生院へ。

贈呈誌

青森アララギ 三八五号 三浦 登

音もなく地響きさへなく原爆は長崎の空に高く燃えにき

秋田アララギ 十月号 東海林 諦 顯

三十年思ひ来たりし吉野山陀羅尼助丸の名も懐かしく

秋楡 十月号 吉 広 万里子

籐木はよききぼうきんぎょは籐草の別名と始めて知りぬ迂闊に生きて

愛媛アララギ 十一月号 高 津 明 児

高専に入りし孫の年齢で予科練出願を強いられし我ら

鹿児島アララギ 十月号 浜 畑 松 枝

夕光の淡き庭木にこもり鳴くひぐらしは終の命ならむか

高知アララギ 十月号 浜 渦 静 子

あけぼのの窓の向うに下弦の月澄みて極まるひとときのあり

滋賀アララギ 十月号 内 林 加 奈 恵

この柿の老木を守る人ありてわれら相会ふありし日の子規と

再びを戻せぬ時を費やして黄色の砂の落つる一分 佐 本 三 恵 子

冬雷 十月号 加 納 久

明け方の鳥のこゑにクーラーを止めて玻璃戸を開け放ちたり

十一月号 白 川 道 子

大丈夫ですかと声をかけられて見守られてゐるは吾かと思ふ
終 十月号 勝 木 四 郎

木の芽川の中洲の薄穂に出でぬ年々に見て年々の思ひ

山歩く夢をしきりに見ると言ふ夫の利かぬ足われは撫づるも
十一月号 片 山 君 子

群山 十月号 八 木 純

隣り合ふ駒ヶ岳より仰ぎ見る朝焼け穏しき木曾の御岳山

檜の木 十月号 上 山 篤 義

公園のブランコの下に水溜り残して昼の雷雨過ぎたり

穂の原 十月号 松 井 花 子

陽除けにとへちまゴーヤの伸び茂り窓辺の我に秋風うれし

明治神宮 献詠作品(秀逸)

小一 岩 本 来 人(岐阜)

せみさんやはちさんたちがはくのにわあそびにくるよ

小一 貫 輪 美 博(埼玉)

かえるなくこえききながらあるいてるわたしのこころ

朝おきて青い空見て元気づく今日もいっぱいそとであそぶぞ

俳詠 かさね 十月号 佐 藤 喜 仙

釣宿の早寝の耳に河鹿笛

十一月号 松 本 周 二

なにもかも覆ひ尽くして葛の風

「氷魚」のことから (143) 岡本八千代

もう柿の時季になった。俳人、坪内稔典氏の著「柿日和」というのを読んだ。その本の帯に、「子規のかじった柿はどんな柿」とあったので、どんどんつられて面白く味わい読んだ。子規の句に、

・御仏に供へあまりの柿十五

・柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

・つりがねの藪のところが渋かりき

というのがあった。愚庵というのは、京都の産寧坂に住んでいた禅僧のことで、その人から柿を贈ってきたのだった。どやら子規の食べた柿の名は「つりがね」という種類の柿だったらしい。また、歌では、

・柿の实のあまきもありぬかきのみ渋きもありぬしづき
ぞうまき

とも歌って返礼したのだった。

その時、実は贈られてきてから、なかなかお札の手紙を出さなかつたらしい。それは、子規が、碧梧桐や虚子らと「小説会」を開いたりして、小説を書きだしている時で、(明治30年頃)忙しい時であった。――。

さて、ここから先回の続き、子規の小説。

△「当世媛鏡」二十六〜二十七 (三年後の秋)

二十六。

○才吉は、中谷 (たく子の兄) がお清に心あることは知っ

ていたので、お清に中谷との結婚を勧めたが、お清は中谷、豁とはついに結婚はせず暇を告げ、向島の奥深く浮世を避けたのであった。

○「寺島の片ほとりわざと土手よりは遠ざかりて竹の垣半ば崩れたるを結び直し門の側には昔誰が植え置きけん松の木少し古りて蔦の葉はらはらと風に動けり」と。

○清のひとり住まい処へ、お清の子供の頃の乳母、あさが訪ねてきた。

○「お嬢さま (清のこと) の御身の上を聞き、承わつて、ひとりで泣きました」と。

○お清は、大磯での事。叔母さまの病氣とて、夜半に大磯をぬけ出したこと。――。恐ろしい顔の人をみれば悪い人、優しい言葉の人に逢えば善い人と思つたが、過りて、ついに悪人の罠にかかつて蝦夷か琉球へ遣られそうになつたこと。――そしてついに中谷様に逢つて救い出されたことをあさに話した。また、

○その中谷様の世話で、自由の身になり、そのまま中谷様の食客となつたことも。

○お清は、あさからは、「叔母様が、才吉とお清と夫婦になるまでは生きていたい」と申しておられたことを聞く。――その後一ヶ月も経たぬうちに叔母は亡くなつた。

○あさは、才吉が近いうちに「ご結婚」と聞いたので、才吉とお清が夫婦になると思つて、飛んできたのだった。

二十七。

○あさは、「中谷様といつしよになれ」とお清にすすめたのであった。(つづく)

ことのはスケッチ (408) 今泉 由利

『元素』

昔のこと、よっちゃん（お手伝いさん）が湯たんぽを入れて下さって、布団の端をトントンと押さえ、子供部屋から出ていってしまうと、『さあ考えよう』待ちどうしかった時間のはじまり。

「何を考えるのか」といっても、地球に生まれて少したっただけの幼い頭でのこと。「地球のはじまり、宇宙のはじまりはじまり」がとても気になっていた。

そしてその時わからなくても、大人になったらわかるのかな。神様は、こんなわからないことを考える」という部分人間から消しておいてくだされば良かったのに……。とか思いながら眠った。

充分な大人になっても、この悩みは未解決のままだった。

科学・化学の本を探すと『宇宙には最初、水素とヘリウムしかなかった』と書かれているけれど、気に入らない。そんな止まっている。はじめがある訳がない。『宇宙には、その時水素とヘリウムしかなかった』と言うのなら分かるけれど。水素とヘリウムしかなかった時から：ゆらぎ：集まり、爆ぜ：物質が出来：今の宇宙になってきて：今が過ぎ：今の宇宙に出来あがっているものが爆ぜるなり、何らかの宇宙的な作用で大分解し：またもとの水素とヘリウムに戻り：ゆらぎ：集まり：。

人間の頭、人間の作った時間や算数では量る、計り知れない宇宙のサイクル、はじまりを境界も終りもない永劫……。今の私の宇宙感。

全ての物質のもと、元素をまずしつかり知りたい、と思う時、「元素のふしぎ展」が催されていた。

放射性元素など難しいものを除き、118種のほとんどの元素が並び、目に見える、感じられるかたちになっている。水素は透明で見えないから、ニッケル水素電池や水素ガスボンベが置いてあり、炭素は鉛筆の芯やダイヤモンド、ネオンは街のネオンのような光りとなり、様々な宝石類の結晶。だんだん元素というものの正体が分かってくる。

いつも使っている日本絵具、顔料が、私の家と同じように並んでいた。これも元素のレベル。銀箔を張り、イオウで燻し、燻し銀の絵を描くのが私の好きな技法。これもまた元素。を実感しつつ。

アルゼンチン側からアンデス山脈越えをしてチリの港まで行く道の辺、山々は虹の様に様々な鉱物の色をしていた。そここの石を拾い帰り、その石を砕き、乳鉢でつぶし、ニカワに混ぜ、絵を描いた。そんなことも思い出した。

「元素体重計」というのにびっくり。この体重計に乗る。酸素42・4 kg、炭素16 kg、水素6・5 kg、窒素1・8 kg、カルシウム0・9 kg、リン0・7 kg、硫黄0・13 kg：まだまだ元素は続いた。人体は酸素が約6割にあたるそうだ。人間も星々と同じ物質で出来ているという意味が分かった。

アルミニウムと同じ体積で、金塊は重く、持ちあがらない、アルミニウムは軽かった。レアアース、レアメタル、人工元素：まったく宇宙遊泳しているみたい。今使われて便利になったものに、元素が工夫応用さこれていることを知った日だった。今夜は元素に抱かれてゆっくり眠ろう。

編集いづいん

今泉 由利

○会員皆様のお力添えにより三河アララギ第六十巻、すなわち六十年間を続けることが出来ました。

この時を待たず亡くなられた先達を、深く切なく
思い出します。

○第六十巻の年がはじまります。四月、大恩寺山の呑龍において記念歌会を催します。詳細は、追って三河アララギ誌にて報告致します。

○三河アララギは、会員、皆様の歌誌です。以前は遠慮がちに過しましたが、今日、遠慮しなければならぬことは何もありません。積極的に御意見、ご提案をお寄せ下さい。そして、より良いご自身の歌誌へとお導きいただきたく思います。

○短歌とは、既成概念、既成の人の範囲にあるものではなく、歌を詠む作者からほとぼしる個性だと思
うのです。個性がすべてです。

○高齢であること、病がちであること、面倒になること……どんなことも甘えてはいけません。折角のご自分です。強く、美しく、やさしいご自分をお守りになつて下さい。そんなご自分の歌を詠まれ、それぞれの個性でもって三河アララギを続けてゆきましょう。

○三河アララギを刷っていただく桜創美社に三河アララギのデータは残っております。歌集など出版することは安易です。他の出版より経費はかかりません。思い立たれましたら、お申し出下さい。

和菓子街道 (74)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

近江に入ってから琵琶湖から着かず離れずして西行してきた東海道は天津宿の中ほどで南に折れる。琵琶湖に背を向けて進むことになるが、そのまま西行すれば三井寺(園城寺)の寺域に達する。近江八景の三井の晩鐘で知られる三井寺だが、ここにはもうひとつ、弁慶が引き摺ったという「引き摺り鐘」も伝わっている。弁慶の怪力譚のひとつだが、この鐘にちなむ「力餅」は、江戸時代初期からの三井寺参詣名物。現代では、境内にある江戸後期創業の本家力軒と、東海道より少し琵琶湖寄りにある明治創業の三井寺力餅本家で作られている。

昔は三井寺力餅本舗の目の前に京阪浜大津駅があり、汽車を降りた三井寺の参拝客は、駅を下りるとそのまま本舗に吸い込まれて



いったそう。「お参りより門前のうまいもの」は今も昔も変わらず? 私も、これから上る逢坂に備えて、力餅を食べていくことにした。

できたての餅に蜜を絡ませ、たっぷりの青大豆粉をまぶした力餅。

◆三井寺力餅本家

住所：滋賀県大津市浜大津2-1-30

電話：077-524-2689

◆本家力軒

住所：滋賀県大津市園城寺町246

電話：077-524-0797

お知らせ

▽新年号の原稿は、十二月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

夏から一足飛びに秋へと時を移したように感じながら日々を過しております。

会員の皆様も、そんな感慨に耽っておりますのではないのでしょうか。

今日(十月二十七日)十一月号を皆様のお手元にお送りすることが出来ました。

編集員として一番ほっとする至福の時を、分かち合つて、手にあたたかいお茶をいただいています。

さて原稿の書き方について

- 楷書で書くこと
- 大きく書くこと
- 地名、植物等にはルビを
- その地方の言葉、いい回し等にもルビを
- 濃い鉛筆・ボールペン・万年筆等を使うこと
- 下書き。
- 私達(山口・小野)が校正を担当しています。(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年十一月二十五日印刷 第五十九巻第十二号
平成二十四年十二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子
今泉 由利

発行人

三河アララギ会
豊川市 御津町 御馬 西三七

TEL (0533)751200九
振替口座 0083001615623九

URL E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumityuri.jp/>

印刷所 株式会社 桜創美